HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ルワンダの観光開発の可能性 |
| Author(s) | 下休場, 千秋 |
| Citation | ルワンダと北海道 : 国際地域連携研究, 60-68 |
| Issue Date | 2018-06 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/71098 |
| Type | report |
| File Information | 08_Shimoyasuba.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# ルワンダの観光開発の可能性

観光学高等研究センター　教授　下休場千秋

要旨：日本が近代化する時代において、日本の地域社会や生活文化の実態とその変容を明らかにした二人の民俗学者、柳田國男と宮本常一が地域社会を見つめる姿勢から観光の意義を考察し、中央アフリカ、カメルーン共和国に現存する伝統的首長国における筆者の調査経験をもとに、「遊びとしての観光」の重要性を論じる。さらに、ルワンダの観光開発における自律的な観光地経営を担う人材育成の必要性を述べる。

## はじめに－近代化と観光開発－

本論では、1994 年のルワンダ虐殺から、奇跡の復興と発展を遂げつつあるルワンダ共和国における観光開発の可能性を論じるにあたり、観光地域経営を担う人材育成の必要性について考察する。

ルワンダと北海道との地域間連携において、観光開発を通した相互交流の可能性を考察するにあたり、日本社会が経験してきた近代化や、戦争や自然災害といった災害による地域社会の変容についての対応から学んだことを再確認することが必要である。

観光開発に対するイメージは、平和で安定した政治、経済、社会状況を基本として、上下水道、エネルギー、情報、交通などのライフラインである社会基盤施設（インフラ）整備と、宿泊・サービス業などのホスピタリティ産業の育成といった、いわゆる地域社会の近代化のイメージと重なる。

日本における社会の近代化と観光開発の経験を問い直す意味は、明治維新以後の近代化の流れの中で、柳田國男が『明治大正史　世相篇』で論じたように、様々な困難を抱えつつも生活を維持しなければならない一般庶民の生活の知恵を基本とする「経世済民の学」としての民俗学の目的と重なる。柳田國男は、近代化により変容する生活文化について、当時の世相として詳細に論じた。その中には、戦争、自然災害といった地域社会に大きな変容にもたらす出来事への地域住民の対応についても含まれている。柳田國男はこの本の「第 5 章、故郷異郷」、及び、「第 6 章、新交通と文化輸送者」において、漂泊民の生活が地方の文化に与えた影響や、交通機関の発達に伴い旅と観光のあり方が変化したことを述べている。

またここで、もう一人の民俗学者として宮本常一について述べたい。宮本常一は、武蔵野美術大学で民俗学、生活史に関する教育に従事しながら、1966（昭和 41）年から近畿日本鉄道が開設した「日本観光文化研究所」の所長として、観光文化に関する様々な研究活動を行った。彼は、生涯に約 16 万キロ、およそ 4 千日の歩く旅をした民俗学者である。宮本常一は、「旅に学ぶ」の中で、次のように述べている。

「ここにこんなものがある、それを見に行けという言い方、それがもし観光の本質であったとするならば、これは大変まとはずれなことになるはずなのです。本来旅というものは、何のためにするのかということになりますと、自分の目で物を確かめてみる、そういうことのために、旅があるはずなのであります。それでなければ、旅をする必要はないのであります。旅をするということは、自方の目で物を確かめることですが、それが今日の旅をみますと、必ずしもそうではない。例えばガイドブックというものがありまして、そのガイドブックを持ってどこかへいく。で、ガイドブックを読んでおって、『ああ、そうか』、それですべてが終わったような顔をして帰ってくるというのが、今日の観光旅行であるのです。これは、実におかしい話だと思うのです。つまり、教科書があって、それだけのものをみると、もうそれでおしまいになる。それだけのものでも、ないよりはいいだろうけれども、その中からいったい何を啓発せられるのかということになってくるのではなかろうか。大事なことは、一人一人が確かな目で物をみるということです。」（宮本、1986、pp78-79）

ここでは、宮本は、旅の本来の姿と楽しみ方について述べている。観光が本来有する意義と観光旅行のあり方に対する民俗学者としての地域との接し方について、大変示唆に富んだ考察である。さらに、次のような記述がある。

「まず、われわれが必要なことは翻訳でないもの、自分の目を通して物をみる、そういう目をもつことが、何より大事なことではなかろうかということを、旅をして考えさせられてきたのです。本物をみるということは、あるく以外に実は方法のないものなんです。自分自身がその体験を持たない限り、実はその本物はわかりようがないのです。そしてみることの中に発見があるのです。そしてそれをみるということは、外側からみるだけではなくて、まず内からみるということが大事なことになっています。」（宮本、1986、pp83-84）

宮本は、民俗学研究を志して日本中を歩いてフィールドワークを行い、1960 年に『忘れられた日本人』を出版し、後世に「旅する巨人」と称され、その後の観光文化研究に先鞭をつけた存在であった。宮本にとって苦しい旅の道中における一番の楽しみは、人との出会いにあったといわれている。民俗学者としての立場から、観光の意義について述べたこれらの記述は、現在においても、観光開発の意味を考察する上で、基本的な視点を提供していると考えられる。「日本観光文化研究所」は、現在、「旅の文化研究所」と名称を変更し、観光文化に関する研究と若手研究者の育成に力を注いでいる。

18 世紀以降、近代社会は人間の移動方法として、それまでの徒歩から鉄道、車、飛

行機、船舶といった大量高速輸送機関を手に入れることができた。観光旅行は、これらの手段を用いることにより、より早く、より遠くへと出かけることが可能となり、鉄道駅の周辺地域が賑わうこととなった。さらに、20 世紀に入ると、アメリカや西ヨーロッパにおいて、大衆への車の普及によるモータリゼーションが始まり、日本でも 1970 年代から本格的な車社会が形成されるようになった。1959 年に著されたヘルマン・シュライバーによる『道の文化史－一つの交響曲－』の序言には、次のようなことが書かれている。

> 「われわれは、今日、道路交通がもっとも重大な危機に際会し、利用者のさまざまな要求の重圧をうけていまにも崩壊しそうになっている今日こそ、道路の有する古い意義を知る必要があるからである。われわれは、交通の有するおどろくべき力を信ずる。数千年以上もむかしに目をもどして、まだ自動車が夢ですらなかったときにラバとともにヒマラヤの峠を越えた、人間というものに信頼をおくからである。道は人間と同じく古く、同じく新しい。そして各世紀が新たに道を造らなければならない。われわれが「道のない」中世の例から、道路建設に関するかぎり過去の遺産を食ってゆくわけにはいかないことを認識し、現代の要請にしたがって新たに道を造るならば、道は過去の多くの時代と民族にそうであったように、われわれの時代にとっても生命の動脈となるであろう。」（シュライバー、1962）。

20 世紀後半の世界では、自動車交通の発展により利便性は飛躍的に高まった一方、交通事故や交通公害により道路は、非人間的な「死の道路」となることをシュライバーは懸念したのである。このような人間の交通手段の変化とそれに伴う地域開発と自然破壊の進行、生活文化の変化という近代化の影響に対して、柳田や宮本は大きな危機感を抱いていたのである。

日本社会が近代化する過程において、柳田國男や宮本常一が果たそうとした経世済民の学としての民俗学の確立を目指した取り組みが、ルワンダの近代化と観光開発のあり方を考察する上で、重要な知見を与えてくれるのではないだろうか。

## 1.「遊びとしての観光」－アフリカ、カメルーンでの調査経験からの考察－

観光開発が地域社会に及ぼす影響を考察するにあたり、旅行者、地域住民、観光業者、行政、専門家などの多様な利害関係者の立場を前提とする必要がある。本論では、アフリカという日本とは地理的、歴史的にこれまで関係の少なかった地域における観光開発について考察するにあたり、観光文化の視点から、「遊びとしての観光」という視点から観光の意義について考察する必要性について述べる。特に、異文化理解を

目的に含み、地域社会の変容を伴う可能性のある観光開発において重要な視点としては、前節において述べたように、観光開発の対象地域において生活する地域住民の生活文化の特徴を、地域住民自身が認識する必要があるということである。

ここで、異文化理解において参考となる、遊びに関する興味深い先行研究を紹介したい。遊びの文化について、文化史家の J・ホイジンガは、自著・『ホモ・ルーデンス』において、人間の文化は遊びから生まれると述べている。その「第 1 章、文化現象としての遊びの本質と意味」において、彼は、次のように記述している。

> 「遊びは、『本気でそうしている』のではないもの、日常生活の外にあると感じられているものだが、それにもかかわらず遊んでいる人を心の底まですっかり捉えてしまうことも可能な一つの自由な活動である、と呼ぶことができる。この行為はどんな物質的利害関係とも結びつかず、それからは何の利得も齎されることはない。それは規定された時間と空間のなかで決められた規則に従い、秩序正しく進行する。またそれは、秘密に取り囲まれていることを好み、ややもすると日常世界とは異なるものである点を、変装の手段でことさら強調したりする社会集団を生み出すのである。」（ホイジンガ、1973、p43）

このように、遊びは日常生活を離れた世界において何の損得にもかかわることのない自由な活動であると述べており、余暇時間を利用した非日常世界へ出かける観光行動は、まさしく人間にとっての遊びであると考えられる。しかし、現実のツアー商品を購入して参加する消費型の観光行動において、遊びとしての醍醐味を得ることができるだろうか。特に、異文化を求める海外観光において、消費型観光ツアーによって対象とする異文化を理解することがどれほど可能であろうか。ホイジンガは人間の遊びの一つとしての祭祀に関して以下のように考察している。

> 「原始社会の祭祀は、共同体の福祉のためになくてはならぬものである。それは宇宙的洞察に満ち、社会的発展を孕んだ神聖な遊びである。しかしそれは、つねに変わることなく遊びである。それは、プラトーンの見たように、必要と真面目さにつつまれた無味乾燥な日常生活の領域の外で、またその領域を超えたところで行われる行為である。」（ホイジンガ、1973、pp68-69）

さらに、仮面が登場する祭祀に関して、次のように記述している。

> 「仮面をかぶった姿を眺めること、それははっきり規定された信仰観

念とは結びつかない。純粋に美的な経験であるにしても、そのときわれわれはたちまちに「日常生活」のなかから連れ出されて、白日の支配する現実界とはどこか違った別の境界へひきこまれる。それは、われわれを未開人の、子供の、詩人の世界へ、遊びの領域へと導いてゆく。」（ホイジンガ、1973、p69）

ホイジンガは、遊びは人間の文化そのものであり、遊びの中に人間の本質を見出すことができると説いている。「遊びとしての観光」について考察することは、何故、人間は旅をするのかを問うことでもある。ここで、筆者自身が、一人の日本人研究者として、異文化社会の生活文化に関するフィールドワークを、中央アフリカ、カメルーン共和国北西州の首長国群において行った経験に基づき、この「遊びとしての観光」の意味について論じたい。

筆者がカメルーン共和国で行ったフィールドワークの問題意識と研究目的は、以下の通りである。

筆者の問題意識は、西洋の科学者たちが提唱するエコロジー思想と、土着的なティカールの民族文化におけるコスモロジーの中にみられる自然観、世界観とを比較し、その差異性や共通性について明らかにすることにより、様々な環境問題を引き起こしてきた近代的な科学技術に基づく大規模な自然改変を伴う人間行動のあり方を改善する手がかりを得ることにある。そこで、1986 年以来、中央アフリカにおいて現地調査を行ってきた王国文化における集落構造と住居・王宮の空間構造の中に見いだされる土着的なコスモロジーの特徴を分析することにより、自然と人間とが共生できるエコロジカルで持続可能な環境デザインのあり方について模索を試みるものである。

筆者は、中央アフリカ、カメルーン共和国北西州に居住する農耕民・ティカールの人びとの汎神論的自然観が、日本固有の神道やカミに対する観念と驚くほど似ていると考えている。そして、この共通性について、人類に普遍的な自然崇拝、祖先崇拝、アニミズム的な原始信仰が示すコスモロジーと、近代自然科学の知識に基づくエコロジー(生態学)との接点に、持続可能な発展を可能とする人間行動の方向が示されるのではないだろうか、とも考えている。

このような仮説をもとに、ティカールの人びとの民族文化に着目し、その集落構造、住居様式、祭祀とコスモロジー、社会組織と王宮の特質を分析することにより、それらが示す空間のコスモロジーを明らかにするとともに、さらに、近年における王国文化の変容に関して分析することにより、望ましい環境デザインの方向性について考察することを目的とした。

調査方法は、カメルーン共和国北西州に居住するティカールの人びとについて、1987 年 1 月から 2001 年 3 月までの計 7 回にわたる現地調査において、バメッシング(Bamessing)王国では王の許可を得て、王宮近くの民家に、2 度の調査で合計 3 ヶ月間

住み込み、住居空間や王宮空間、さらに集落空間の構造や機能に関する実地調査や聞き取り調査を行った。また、バフツ(Bafut)王国を始めとするその他の調査地では、主に王宮については可能なかぎりの立ち入り調査を行い、歩測により建物の平面配置図を作成し、それが不可能な場合は概略図のみを作成した上で、王の従臣達から空間機能についての聞き取りを行った。調査の中で特に感じた困難は、王宮内に王国の人びとであっても、部外者、勿論、筆者も含めて自由に立ち入ることができない空間が存在することであった。しかし、この事項はむしろ、王国の宗教・政治・行政・軍事機能の中心にある神聖王が居住する王宮空間の機能的あるいは象徴的意味の認識を容易とし、王宮空間の把握に役立ったように思える。

カメルーン共和国北西州のティカールの二つの王国、バメッシングとバフツにおける以上の調査結果をもとに、ティカールの人びとが生活する王国の空間から読み取ることのできるコスモロジーと空間特性について考察した。さらに、今後の環境保全を前提とした地域計画におけるコスモロジカルな風景デザイン論の必要性と可能性についても言及した。

本研究をまとめた論文の第１章では、序論に続く環境デザインと地域生態計画について記述し、筆者が研究対象とするティカールの王国文化が、その研究対象としてどれ程の課題性を持つかを問うた。さらに、バメンダ高原にある多くの王国の中からアウィン(Awing)王国を取り上げ、彼らの「聖地」であるアウィン湖を観光資源として開発する事例について考察した。

第２章では、バメッシングはカメルーン北西州メザム(Mezam)県ンドップ(Ndop)郡の一村落であり、セミバントゥー系ティカール民族集団の一王国であるバメッシング王国の集落構造を分析し、彼らのコスモロジーについて考察した。バメッシングを選定した理由は、土器やラフィアバッグなどの伝統的工芸品が古くから現在に至るまで製作されてきたことや、現在も旧態の王制社会組織が強固に伝承されていることがその理由である 。

第３章においては、前章と同様にバメッシングを事例にして、ティカールの伝統的な住居様式とその変容について記述し、神聖王を中心とする王制社会には身分の階層構造が形成されており、住居様式にもその違いが反映されていることを明らかにした。住居は生活の拠点であると共に、その住人にとってはコスモロジーの中心でもあるため、住居の建築過程を通じて、これらの観察から得た資料を検討することにより、住居空間における世界観を示した。

第４章では、既に触れてきたように、王制社会における最も重要な建築空間である王宮の空間構造と機能に着目し、２００以上も存在するといわれているティカールの王国の中から、前述したバメッシング王国に加えて、バフツ王国の王宮の各建築物を事例として取り上げ比較検討した。バフツを選定した理由は、英国女王エリザベス２世が 1956 年にナイジェリアを訪問したとき、先代の王アチリンビ２世(Achirimbi Ⅱ)

が西カメルーンの代表として現地に赴き女王に謁見し、また、現王アブンビ 2 世(Abumbi Ⅱ)も 1997 年に結成された「北西州神聖王連合」の会長に選出されたことからも判断がつくように、バフツ王国は北西州にある五つの有力な王国の中でも、常に外部からの変革の波に革新的に対応してきた王国であるからであり、外部からの訪問者を受け入れる態勢の整った王国である。さらに、既存の民族学的調査研究の蓄積がある王国でもある。また、高度に分化した王制社会組織についての理解なしに、王宮の空間構造と機能を的確に把握することは困難である。バフツ王国では、筆者自身がバフツ王国の王制社会組織への王国民としての加入儀礼を受けた体験を基にして考察をすることにより、王国文化の中心地である王宮のコスモロジーを探究した。

第 5 章では、近年における王国の外部からの影響により、王国文化がどのように変容しつつあるかに関して考察した。ここでは、バフツ王宮の修復と博物館開設計画について記述し、文化遺産として観光的価値を持ち始めた王宮と民族芸術のあり方を論じることにより、ティカールの人びとの自然観の変化を解明した。

そして最後に、ティカールの王国文化における集落、住居、王宮の風景を分析する中から、自然と人間の共存関係を明らかにし、持続可能な発展を前提とした環境デザインに対するコスモロジー研究の重要性を指摘した。また、アフリカを始めとする地球上の多様な民族文化圏における同様な環境行動研究の必要性と今後の課題について記述した。

日本が近代化する過程において、日本文化の固有性、社会文化の変容について明らかにするために、民俗学者の柳田國男や宮本常一は、地域社会の常民の生活文化を歩いてつぶさに記録しようとした。カメルーン共和国は、フランスとイギリスの植民地支配から、近代国家として独立してから、60 年足らずの歴史しかない。その間に、カメルーンの社会は大きく変容した。カメルーン共和国における主要な観光資源として、筆者の調査対象でもある伝統的首長国群や多様な民族文化、自然公園の野生動植物と景観などがあり、今後、エコツーリズムの推進が期待されている。

以上のフィールドワークの内容から、遊びとしての人間の文化が、500 年近くにわたる王制社会組織を継承してきたといえる。時代により変容しつつ伝承されてきた神聖王を中心とする王制社会、土着信仰、儀礼祭祀などの文化が伝承されてきた要因の解明には、今後、ホイジンガが述べた人間の文化の本質としての遊びの意味、「ホモ・ルーデンス（遊ぶ人)」としての人間存在の意味について、アクターネットワーク理論（ANT）等による分析と考察が必要であると考える。

## 2. 観光分野におけるルワンダと北海道の地域間連携

ルワンダ政府観光局のホームページ（REMARKABLE RWANDA, 2018）によると、ルワンダ国内の主要な観光資源として、以下のものが取り上げられている。

・KIGALI CITY（Genocide Memorials, Natural History Museum - Kandt House, Presidential Palace, Community Visits, Arts & Crafts, Sport & Athletics）
・VOLCANOES NATIONAL PARK（Primate Tracking & Hiking, Musanze Caves, Buhanga EcoPark, Iby'Iwacu Cultural Village）
・LAKE KIVU / RUBAVU（Watersports）
・NYUNGWE NATIONAL PARK（Chimpanzee Tracking, Other Primates, Birds, Canopy Walkway, Hiking Trails, Culture, Community-based tourism, Conservation, Vegetation）
・KARONGI（Amahoro Island, Coffee & Tea, Congo Nile Trail, Bisesero Genocide Memorial）
・AKAGERA NATIONAL PARK（Game drives, Boat Trips & Fishing, Birding, Behind the Scenes）
・MUHAZI（Lake Muhazi）

以上の観光資源は、首都・キガリの虐殺記念館、自然史歴史博物館、旧大統領府、工芸センター、3 か所の国立公園（火山、ゴリラ・チンパンジー見学エコツアー、文化村、環境保全）、キブ湖、ムハジ湖などである。ルワンダの観光資源には、北海道における観光資源と同様に、豊かな自然資源及び文化資源があり、これらの資源の価値を生かす観光開発を担う人材の育成が大きな課題であると考えられる。

ルワンダは、カメルーンと同時期に、ベルギーの植民地から独立し発展してきたが、1990 年以降の民族紛争による内戦と 1994 年の虐殺を経て、2000 年から「アフリカの奇跡」と呼ばれる ICT 立国を目指した経済発展が実現している。ルワンダ共和国の領域は、ヨーロッパ人が進出する以前、14 世紀頃からルワンダ王国が支配していたといわれており、ルワンダ王国の文化遺産が観光資源として重要な価値を有していると考えられる。

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院では、平成29（2017）年度より、主に社会人を対象とする履修証明プログラム、「デスティネーション・マネージャー育成プログラム」を開始している。このプログラムでは、「地域が自律的かつ戦略的な観光振興に取り組む上で、経営的な視点から観光まちづくりを推進し、同時に域内外の多様な主体との協働のあり方や複雑な利害関係を調整する役割を担う観光地域経営組織・DMO (Destination Management Organization) において、中核的な役割を担う人材を育成することを目的として、理論・知識の習得から、実践的な専門的知見を身につけるために、国際広報メディア・観光学院（観光創造専攻）開講の正規科目を中心に構成し、さらに高い専門性と実践力の養成をはかるため、履修証明プログラム独自の『実践講習』科目を開設している。」（北海道大学大学院国際広報メディア・観

光学院、2018）

北海道における観光地域経営組織においてその活動を担うことのできる人材育成が、北海道大学において始まっており、ルワンダにおける観光開発においても、同様な取り組みが、地域間連携の枠組みにおいて実現することが望まれる。ルワンダ共和国における観光開発は大きな可能性を秘めていると考えられるが、それを実現するには、日本が経験してきたように、地域社会で生活する住民の暮らしそのものが一定程度の水準を確保できなければ、地域住民が自律的に観光地域経営を行うことは困難であると考えられる。そのため、ルワンダの地方電化経営モデルの実現を目指す、今回のルワンダと北海道の国際地域間連携は、電化が進んでいないルワンダの農村地域における地域住民の生活水準を高めるための事業の試金石となる。今後、短期的な事業成果を求めるだけではなく、中長期的な視点から、ルワンダの経済開発と地域社会における生活文化の向上を目指す連携事業を行ってゆくことが、ルワンダにおける持続的な観光開発を実現するためには必要不可欠であろう。

## 参考文献


ホイジンガ(Johan Huizinga)、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫、1973。

宮本常一、『宮本常一著作集 31 旅に学ぶ』未來社、1986。

宮本常一、『忘れられた日本人』岩波文庫、1984 年。

ヘルマン・シュライバー(Hermann Schreiber)、関楠生訳『道の文化史－一つの交響曲－』岩波書店、1962 年。

下休場千秋、『民族文化の環境デザイン』古今書院、2005。

柳田國男、『明治大正史　世相篇』中公クラシックス、2001 年。

Michael Mike, *"ACTOR-NETWORK THEORY Trials, Trails and Translations"*, SAGE Publications Ltd, London, 2017.

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院『平成 30 年度履修証明プログラム「デスティネーション・マネージャー育成プログラム」募集要項』https://www.imc.hokudai.ac.jp/news/docs/H30Rsyu_bosyu_yoko.pdf （2018 年 3 月 3 日閲覧）

REMARKABLE RWANDA　http://www.rwandatourism.com/ （2018 年 3 月 1 日閲覧）